

## 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年度目)

### 1. 研究課題

(和文) ヨーロッパ現代思想と政治

(英文) Contemporary European Philosophy and Politics

### 2. 研究代表者

(氏名) 市田良彦

### 3. 研究期間

平成 23 年 4 月 から 平成 26 年 3 月 まで

### 4. 研究目的 (400字程度)

1968年前後を境としてフランスを中心に起こった構造主義・ポスト構造主義の思想潮流の諸相を、21世紀初頭の現在までを射程にいれ、特に同時代の政治との関わりにおいて、理論的かつ歴史的に再検討する。その際、(1)正統派マルクス主義(共産党)との相違、(2)精神分析を中心とする「主体」の理論との合流と離反、(3)1970年代以降英米を中心に勃興し、現在強い影響力を持つ現代政治哲学の諸潮流との異同に留意する。

### 5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年度は、4月21日、7月28日、9月29日、12月1日、1月26日、3月9日の6回の研究会を開催した。このうち、4月21日の研究会は、班長である市田良彦の『革命論～マルチチュードの政治哲学序説』(平凡社新書2012年2月刊)を素材として、班員である小泉義之とゲストの國分功一郎(高崎経済大学准教授)をコメンテーターに迎え、著者の市田とコメンテーターさらには班員を交えた公開討論会の形式をとった。この市田の書物は、班員に向けた研究班の問題設定の提示とその歴史的な見取り図を示すものである。その他の研究会では、毎回二人の班員からの研究発表とそれについての議論が行なわれた。

### 6. 研究成果の概要 (400字程度)

4月の公開研究会では、いわゆるヨーロッパの「現代思想」を、正統派マルクス主義から差異化して生まれた「1968年の思想」として捉え、(1)史的唯物論・労働者主体論に対して新たな政治的主体の問題化されたこと、(2)この主体の構成・主体化の問題系を介して、現代思想は強く精神分析(特にラカンは精神分析)との関係を持ったこと、(3)ヨーロッパ現代思想とほぼ同時期に生まれ、現代政治にとっての規範的理論として参照され続けているロールズ正義論、ハーバーマス討議的行為論、およびそれをめぐる議論との異同において、現代思想を捉え返すべきことが、研究班員の間で共通の了解とされた。

本年度の研究発表は、ルカーチの政治論(長崎浩)、アルチュセールのイデオロギー論(伊吹浩一)、ラカン派の分析家養成を巡る議論(立木康介)、現代マルクス主義と言語論的転回(松本潤一郎)、ネグリのマルチチュード論とポーコックの共和主義論(王寺賢太)、フーコーの統治論(箱田徹)、アドルノとベンヤミンの集団論(藤井俊之)、ドゥルーズにおける「革命的に

なること」(廣瀬純)、ドゥルーズ＝ガタリの資本主義論(佐藤嘉幸)、ランシエールのデリダ批判(上田和彦)といった多岐にわたるテーマが扱われた。いずれの発表も、上記の研究班の問題設定から出発し、それぞれの立場から対象の理論的・歴史的立場づけを図るものであった。

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績(出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

市田の『革命論』に続き、長崎浩の『革命の哲学』(作品社6月)、小泉義之の『生と病の哲学』(青土社7月)など、今年度も班員の間から主著と目されるべき重要な著作が出版された。また10月の『現代思想』ルソー特集号には、佐藤淳二と王寺賢太が論文を、長原豊が翻訳を掲載している。11月には雑誌『情況』の理論・思想編第一号として「<公共>に抗する」が出版された。この編集委員会には、市田・長崎・小泉のほか、班員の間からほかに長原豊・中村勝己・伊吹浩一・王寺賢太・廣瀬純が名を連ねている。また創刊号には、市田・長崎・小泉・長原・王寺・廣瀬のほか、佐藤淳二と箱田徹が寄稿した。

今年度唯一の公開研究会となる4月の研究会には、研究班員以外にも50名程度の参加者を得て、活発な議論が展開された。また、昨年度2月のシンポジウムを機に、西川長夫氏から人文科学研究所が寄贈を受けた68年5月関係の資料についても、整理とデータ化を進め、来年度にはホームページ上で公開できるよう準備を進めている。

#### 8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数			延べ人数		
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内(法人内)	1	5	0	30	24	0	30
国立大学	3	3	0	0	15	0	0
公立大学	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	7	10	0	0	50	0	0
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	2	0	20	10	0	20
計	14	20	0	50	99	0	50

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例)・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合)：参加人数2人、延べ人数6人

#### 9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	38	
うち国際学術誌に掲載された論文数	(34)	5 (4)

※下段の( )内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		
論文数		
うち国際学術誌に掲載された論文数	( )	( )

※下段の ( ) 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由	人文科学分野においてはインパクトファクターそのものの定義が困難であるが、学会誌ないし商業誌として信頼性と多くの読者を持つことで高い評価を得ているものに限定した。		
掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
『思想』	3	「狂気のお、狂女への愛、狂気のなかの愛—ブルトン、デュラス、ラカン—」	立木康介
『現代思想』	3	「ルソーの思想圏」	<u>佐藤淳二</u>
『情況別冊 思想・理論編』	7	「債務共和国の終焉」	<u>市田良彦</u> ・ <u>王寺賢太</u> ・ <u>小泉義之</u> ・ <u>長原豊</u>